

「日本研究」研究室の十年

一 研究室の構成

昭和四十九年、広島大学教養部が改組されて、総合科学部が発足し、その中に、地域文化コース日本研究講座が大講座として産声をあげてから十年が経つ。当初のスタッフは、森田武（日本語学）、後藤陽一（日本史学）、中川徳之助（日本文学）、渡辺則文（日本史学）、深萱和男（日本文学）、村上誠（地理学）、堤正信（地理学）の六名であった。昭和五十年から学部二年生三名が第一回生として所属して、本格的にスタートした。学際研究を目指す新しい体制は、模索の中にも、喜びの出発であった。

昭和五十一年三月、森田教官が定年退官され（後に名誉教授）、四月には、重松明久、南不二男教官を迎えた。昭和五十二年三月には、後藤教官が定年退官になり（後に名誉教授）、教室の創設に貢献された重鎮を相次いで送り出

すことになった。同年四月には、頼祺一教官が着任した。昭和五十三年三月には、日本研究の第一回卒業生を送り出した。また、二年間在籍された南教官が、国立国語研究所へ転出された。同年四月には、大学院地域研究研究所・修士課程が創設され、日本研究は、日本・アジア系として、初の大学院生二名を迎えた。昭和五十四年三月、堤教官が広島女子大学へ転出し、四月には永尾章曹教官を、同年十月には佐竹昭教官を迎えた。

昭和五十八年三月、重松教官が定年退官され、同年四月から酒川茂教官が加わった。翌五十九年三月には、中川教官が定年退官され、深萱教官が三重大学人文学部へ転出されるなど、長年教室の充実に尽力された先生方をお送りせねばならなかった。同年四月には、朝倉尚、櫻原修の若いお二人を迎えた。

思えば、この十年間、七名の教官が転・退官し、八名が新たに加わり、総合科学部に不動の地歩を築きあげてき

たと言える。この間、学部で七十八名、大学院では十四名を送り出し、各界で活躍を続けている。日本研究の特色の一つに留学生の受け入れがある。その数は、近隣諸国はもとより、ヨーロッパ・アフリカ・オセアニアなどから在學生も含めて十四名に達する。

二 開講講義

過去十年間、日本研究講座で開講した授業題目と担当者は次の通りである。

日本語学関係では、キリシタン語学にぞうけいが深く、日葡辞書の研究で知られる森田武教官は「日本語発達史」を講じ、南不二男教官は「現代日本語論」、現在は、永尾章曹教官が「日本語表現論」を講じる。

日本文学関係では、五山文学や徒然草の研究で知られる中川徳之助教官が「日本古典文学研究」を、白樺派文学研究で知られる深査和男教官が「日本現代文学」を講じたが、現在では、朝倉尚・榎原修両教官がそれぞれ前任者の講義を受けついでいる。

日本歴史関係では、近世農村史の研究で知られ、昭和四十九年、中国文化賞を受賞した後藤陽一教官が「日本近世社会史論」、日本塩業史の草分け、渡辺則文教官が「日本社会経済史」を講じて始まった。その後、頼祺一教官、佐

竹昭教官が加わり、三名で「日本史研究」を開講している。真宗史など日本宗教史研究で知られる重松明久教官によって講じられた「日本思想文化研究」は、現在、頼教官が「日本思想史」、佐竹教官が「日本文化論」として講じている。日本地域研究では、渡辺教官が「瀬戸内海地域研究」、後に「日本地域研究」を講じ、村上誠教官が「日本地誌」、「人文地理学」、「日本地域研究実習」を担当してきた。また「日本民俗学」は、河岡武春、網野善彦教官によって集中講義で実施されてきた。さらに、地域文化コースの共通必修・選択科目としての、地域学、地域学実習、文化交流論などにも出講してきた。

(村上 誠)

三 卒業・修了生及び論文題目

卒業論文題目

(一九七七年度)

佃 雅文：近世中国山地の鉄山労働者に関する考察

川田良一：化政期の悪所とその文化——悪所の位置的考察
を中心に——

菅原純子：維新期の民衆思想家——窪田次郎についての一考察——

(一九七八年度)

梶本法子：神仏分離とその展開過程

河合恵子：広島的神楽——現状と問題点——

川村紀美子：漂流民の研究

木下素子：現代マンガ読者の思想

角 和雄：永井荷風研究——外遊を中心として——

田中正人：福井平野における条里の展開

土岸史典：近世芸備地方における製紙業の研究

中山富広：幕末維新期における瀬戸内地方の農民層分解に

関する一考察 安芸国賀茂郡広村を中心として——

錦織典子：近世封建制下における農村社会の女性

浜岡 正：地域開発の論理と実態——中国縦貫道沿道地域の

場合——

原田智穂子：なまへのイメージ——現代青年の意識調査から——

(一九七九年度)

松岡敏勝：倉田百三論——若き日の百三の思想と強迫観念

症を中心に——

飯田佳子：山代巴の創作活動とその作品研究——「荷車の

歌」を中心に——

石塚幸雄：地域福祉の研究

伊藤教代：在日朝鮮人被爆者問題に関する一考察——ある

被爆婦人の戦後を中心に——

久住美津恵：漢字習得の経路と要因に関する研究

井上淳子：ヨーロッパ人宣教師の日本観——フロイスの「日

本史」を中心に——

小谷千弘：丹後機業の研究

小林繁実：古代における星辰信仰について——陰陽寮を中

心として——

谷村武士：錦川流域方言の研究——岩国市天尾地域を中心

として——

丸野康一：現代日本語の表記の諸相について——カタカナ

表記からみた日本語試論——

安永ゆかり：日本近世における育児論の展開

六郷 寛：明治末期神社併合の地域的考察——広島県を中

心として——

(一九八〇年度)

中井良幸：待遇表現の研究——現代学生の言語生活調査を

通して——

岡本市郎：芸北地方における廃村の研究——加計町を例と

して——

高橋真奈美：平塚らいてうの研究——人間形成と女性解放

への出発——

徳田邦明：古代における鬼霊信仰について——光仁・桓武

期の怨霊事件——

浪尾公子：かぶきの思想——中世の民衆芸能——

長谷川豊彦：流行語について

妙見佳代子：阿波藍業における労働力の研究

森本 純：中世芸備地方における真宗の展開過程

諸橋和恵：別役実論

山川訓弘：輪中村落の構造とその変貌

吉田 誠：日本昔話についての一私論——狐のイメージを中心に——

中心に——

(一九八一年度)

清水俊行：現代小説と共同体——現代小説における仮想国

家の持つ意味——

児島健二：都市型工業の研究

澤田伸子：中島敦研究——「山月記」を中心に——

田中裕子：江戸時代の女性像

田村あけみ：近松文学における遊女ことばの研究

(一九八二年度)

島津貴広：キリスト教伝来とその禁圧——イエズス会士と

日本における布教方法についての考察を中心と

して——

浅田由美：萩原朔太郎『月に吠える』形成期の研究

石村悦美：原民喜「夏の花」論

尾崎恵美子：山本周五郎研究——その女性観について——

越智聖司：言語と社会環境の関係についての基礎的考察——

「天声人語」の語彙の変遷を中心に——

叶井貫一郎：北からみた日本——十九世紀ロシア知識人の

日本観——

小嶋由美：宮澤賢二と『注文の多い料理店』

坂井幸治：中原中也論

塩田佳枝：筒井康隆研究

西村さゆり：樋口一葉論——「たけくらべ」を中心に——

福嶋裕子：古代における「鬼」概念の変遷

松下恭子：戦時体制下の国民統制について——平良村の部

落会を例として——

三宗弘子：福沢諭吉の思想転回とその背景——『学問のす

すめ』と『文明論の概略』を中心として——

三好加代子：松山藩における享保飢饉の一考察——義能作

兵衛を中心として——

安岡知子：文化財保護の史的分析

(一九八三年度)

石藤智之：「神皇正統記」研究

弥富昭夫：庄野潤三論

北村浩司：竹内好論——国民文学論争を中心に——

中原 亨：出口王仁三郎の予言——「型の思想」を中心と

して——

押川清美：鷗外と女性——その女性観について——

鹿山和子：平家の落人伝説について

水口直樹：三島由起夫論

向井敏弘：ことばと人間関係について——自称詞・対称詞

を中心に——

安永省二郎：武一騒動の研究

(一九八四年度)

横田泰行：近世広島藩農政に関する一考察

村尾信彦：深沢七郎論

藤井晴稔：志賀直哉研究——そのリアリズムと詩的描写——

江頭季里子：井上ひさしの戯曲における表現の研究

岡崎葉子：武士道思想の研究

川原和子：宮沢賢治童話研究——その文章表現の特徴を中

心に——

小林由美：竹取説話の研究——伝承から物語へ——

浜岡多佳子：幕末維新期における尾道の社会経済構造

広田知恵美：大衆伝達における日本語表現の研究——雑誌

広告を中心に——

松岡 実：地方中核都市における交通需要と交通体系——

——広島都市圏の場合——

満生千幸：単一企業都市の研究——愛媛県新居浜市を例と

して——

修士論文題目

(一九七九年度)

川田良一：江戸後期庶民生活に関する一考察——裏店と悪

所をめぐって——

佃 雅文：近世における砂鉄精錬業の研究——とくに広島

藩を中心に——

(一九八〇年度)

天羽康隆：川端康成における日本的なるもの——『山の音』

を中心に——

利恵：二葉亭四迷——その女性観について——

(一九八一年度)

小林繁実：日本古代における星辰観——六国史を中心とし

て——

六郷 寛：近世安芸地方における「講中」の研究

(一九八二年度)

練 炳崑：芥川龍之介作品研究——古典との関係を中心に

岡本市郎：広島県における過疎地域の研究

谷口絹枝：『女人芸術』の研究

古田芳江：北村透谷論

(一九八三年度)

李文祺：志賀直哉研究

(一九八四年度)

権 恩淑：日・韓両国語における受身表現の比較研究

李 庸惠：日・韓両国語における敬語表現の比較研究

曾 徳芳：台日の都市における中心商店街の比較研究

研究生の在籍期間および研究題目

(一九七四年度)

Alberta Béatrice (1974. 10 ~ 1975. 3)

：和漢朗詠集の研究

(一九七五年度)

Bendixen Dora Agot Elisabeth (1976. 2. 1 ~ 1976. 3. 31)

：近世日本美術史

(一九七六年度)

斉藤広光 (1976. 4. 1 ~ 1976. 9. 30)

：高校同和教育における理論と実践について

(一九七八年度)

伊藤俊彦 (1978. 4. 1 ~ 1979. 3. 31)

：中世真宗思想史の研究

大上育也 (1978. 10. 1 ~ 1979. 3. 31)

：学校教育の中における同和教育の位置づけと展開

開

中村虎雄 (1978. 10. 1 ~ 1979. 3. 31)

：同和問題の歴史的背景

(一九八一年度)

李文祺 (1981. 4. 1 ~ 1982. 3. 31)

：近代文学 (日本戦後文学の研究)

(一九八二年度)

曾 徳芳 (1982. 4. 1 ~ 1983. 3. 31)

：人口と集落に関する日台の比較研究

李 庸恵 (1982. 10. 13 ~ 1983. 3. 31)

：日韓両国語における待遇法の比較研究

Scheller Martina (1982. 4. 1 ~ 1984. 9. 30)

：江戸時代瀬戸内海地域における商品流通の研究

Zaroui Mabrouka (1982. 10. 1 ~ 1984. 3. 31)

：日本語の比較言語学的研究

(一九八三年度)

林 雪星 (1983. 4. 5 ~ 1984. 3. 31)

：近代日本女流文学研究

Willis Vaughan Phillip (1984. 1. 25 ~)

：現代日本文学研究

(一九八四年度)

易 素玫 (1984. 10. 1 ~)

：明治維新における人文科学の革新

金 省希 (1984. 10. 1 ~)

：日本近代史の研究

Heiko Lüben (1984. 11. 1 ~)

：日本近代史の研究